

言葉の説明

生殖補助医療(ART) 生殖補助医療とは不妊の人たちが妊娠できるようにするために使われる一連の治療のことを指します。

体外受精(IVF) 体外受精とは、卵子を受精させる施設があるところで実施されるある種の治療です。“体外”は、“ガラスの容器の中で”ということの意味ですが、今日ではプラスチックの容器が使われています。受精した卵子は子宮に移植されます。

ギフト(GIFT 配偶子卵管内移植) ギフトは、まだ受精に至っていない卵子と精子をどちらか片方の卵管に移植します。この技術が有効であるためには、卵管が正常でなければなりません。

顕微授精(ICSI) 顕微授精はブルッセル(ベルギー)のグループによって完成されたもので、卵子に直接、ひとつの精虫を入れるために非常に精巧なピペットを使います。少なくとも、わずかでも動く精虫が必要で、これが授精のために取り出され(運動性はまだ生きている証拠としても使われます)、精虫は授精前に運動しないようにされます。さもないと、精虫は卵子の中で泳いで卵子の殻をやぶってしまいます。顕微授精は、抗精子抗体にも有効であることが知られています。

非配偶者間人工授精(DI、もしくはAID) 非配偶者間人工授精では、妊娠するために、男性の提供者(夫婦の知人かもしれないし、知らない男性かもしれませんが)からもらった精子を女性の子宮頸部に注入します。これはかつて、AIDといわれてきたものですが、最近ではDIといわれています。

その他の情報

近頃では、海外では次のような本が3歳から12歳くらいの子どもにむけて用意されています。さらに、これ以外にも出版物をご存知の場合には、その情報を是非提供してください。そうしていただくと助かります。

Tim Appleton: I Am a Little Frostie!

この本は凍結受精卵について子どもたちに話すために作られた本です。入手するには、以下へご連絡ください。T. Appleton IFC Resource Centre, 44 Everden Road, Harlton, Cambridge CB3 7ET UK, tel +44(0) 1223 264 332.

Tim Appleton: My Beginnings – A Very Special Story

この本は3歳から7歳の子ども向けに、さまざまな不妊治療の形についての話が描かれています。

体外受精や顕微授精のような生殖技術が、不妊に直面しているカップルに利用されることはしだいに増えてきています。たくさんの国で、こうした技術は標準的な医療となっていて、こうした技術の力をかりて生まれてくる子どもの数も年々増えてきています。不妊を経験したたくさんの親御さんたちが、自分の子どもや他の人たちと、どうやって子どもができたについて話すことに自信を持てずにいます。このパンフレットは、なぜこうした情報を共有することが手助けとなるのかを知っていただき、お子さんに彼らがどうやって生まれてきたのかを話す決めた親御さん達に、情報提供することを目的としています。

不妊の医療消費者国際サポート組織(iCSI)は、医療提供者、政府組織、各国のメディアと効果的な関係を築くことによって、患者さんが生殖補助医療のヘルスケアと公共政策において対等な立場にたてるよう、患者さんのエンパワーメントに取り組んでいます。

この目標と私たちが取り組んでいる課題を促進するために、私たちは毎年、各国の代表者が集い国際会議を開いています。これは欧州ヒト生殖胎生学会(ESHRE)の年次大会の前に開催されます。

ホームページ
www.icsi.ws
 Eメール
info@icsi.ws

Supported by an educational grant from:



生殖補助医療 (ART)の助けを かりた家族づくり



子どもとどのように
このことを話しますか



International Consumer Support for Infertility

生殖補助医療 (ART) で家族をつくるということ—この事実をどのように子どもに話すのか？

人はどうやって妊娠するのか について子どもに話すのはなぜ？

性や、どうして子どもが生まれてきたかについて話すのはとても当たり前のことになってきています。子どもたちが「赤ちゃんはどこからきたの」と質問し始める頃から、これは、ほとんどの親御さんや(教師など)子どものケアを専門とする人たちにとって、常に注目の話題なのです。でも、不妊を経験して不妊治療を受けてきた親御さんたちには、子どもにさらに話さなければならぬことがあります。それは他の親御さんと違って、子どものいる家庭を築くということが簡単ではなかったからです。良し悪しではなく、ただ他のご夫婦とは違ったのです。自分たちの不妊や不妊治療の経験をお話することは、どのようにみなさんのご家族が出きたかという物語をもっとすばらしいものにします。それはまた、不妊を特別視せず、不妊を経験しているカップルには不妊治療を前向きな選択として受け止められるようにもするのです。

いつ、どうやって？

子どもたちにどうやって子どもがうまれてきたかについて話すべき年齢は決まっていません。それは子どもたちの精神面の発達によって異なり、その子が話す能力を持ち始めれば、そのときが自分がどうやって生まれたかを知りたいがる年頃といえるのです。不妊治療のことまで話すかどうかは別として、性や子どもがどうやって生まれるかについて話すことは、1回話せばいいというようなものではなく、継続して「話すこと」であると理解することが大切なのです。子どもたちは、しだいに年齢に応じた質問をするようになり、言い換えれば、年齢とともに、ますますその質問は複雑になってきます。

子どもたちに与えられる答えも、この精神的な発達を考慮して、ますます複雑にする必要があります。これは普通、より年齢の高い子どもが、より細かな質問と答えを求めるということを意味します。3歳の子どもの典型的な質問は「私は／ぼくは、どこから来たの？」かもしれません。このような質問に対しては、比較的簡単に、「どの赤ちゃんもお母さんの卵細胞とお父さんの精子細胞からできているのよ」という答えで十分かもしれません。より詳しい説明は、子どもがやがて、どうやって卵子と精子がくっついて実際に子どもができるのかを聞いてくるようになったときにすれば良いのです。

質問への答えについては、ありのままを述べるようにしましょう。子どもが生まれてきたことは、興味深く楽しいことだというように話しましょう。ここにひとつの案をあげてみましょう。でも、もっと専門的に、あるいはより簡単に話したい場合があるでしょうから、どうぞ自分の言葉で話してあげて下さい。

「どの赤ちゃんもママの小さな卵とパパの小さな精子でつくられるのよ。でもママのからだ(もしくは、パパのからだ)の赤ちゃんを作るところの一部がうまく働かなくて、それであなたができたためには、ママとパパはお医者さんに手伝ってほしいとたのまなければいけなかったの。お医者さんたちはママの卵をひとつとって、それにパパの精子もとって、研究室でそれを小さなお皿に入れて混ぜて、そしてあなたができたのよ。しかもお皿の中で!それはね体外受精(もしくは顕微授精、またはあなた自身のその技術の呼び方で)といわれるものなの。そしてね、お医者さんたちは、本当にまだ小さな小さなあなたをママのおなかに入れたの。そして、あなたはママのおなかの中で、お腹の外に出てもいい大きさになるまで少しずつ成長したのよ。」

またある段階では、こうした妊娠がほかのほとんどの赤ちゃんができるときと違うということも話してあげる必要があるでしょう。通常の妊娠の際のセックスについて話すかどうか、またどう話すかはあなた次第です。もしあなたとお子さんがほかの体外受精で生まれ

た子どもを知っているなら、その話もしてあげてください(その子たちが話しても構わなければの話ですが)。子どもの成長にしたがって、その子自身ももっと詳しい過程について知りたがるようになるかもしれません。そのときは、どうぞ子どもたちに話すことを恐れないでください。あるいは反対に特別に関心を抱かないかもしれません。これはこれでまったく正常であり、問題ありません。

“生殖補助医療でできた親子が
ほかにもたくさんいることに
驚くかもしれません”

生殖補助医療で生まれてきた子どもはあなたの周囲にもたくさんいるかもしれません。ご自分たちの不妊治療のことをもし話してもいいと思われるなら、他の親御さんたちにオープンに話してみてください。そうすれば、こうした生殖補助医療を通して生まれた親子がほかにもたくさんいることに驚くかもしれません。それに、もしあなたのお子さんが周囲にも自分と同じような環境の中でうまれてきた子がいると知ったなら、お子さんもこうした経験は普通なんだと思えるようになるでしょう。

子どもに関するほかのすべての問題と同じように、子どもの年齢に適した言葉を使って話すことと、なぜそうなったのかをもっと理解したいと思う子どもの欲求に気づくことが大事です。でも大人の私たちには、不妊や不妊治療の経験には心の痛みや傷を伴うことがよくあるので、こうした話を一緒にすることはつらいことです。でも子どもにとっては、ちょうど他の物事の仕組みを学ぶのと同じように、ただそれについての事実を知り理解するだけにすぎないのかもしれない。